愛知淑徳大学
創造表現学部 創作表現専攻
講師
松田 樹

随想

肯定の力を肯定する

二三年四月から、創作表現専攻で勤務しています。主に指導するのは、小説を書きたいという学生たち。

これまで私は、文学研究を学んできました。そこでは歴史のふるいにかけられ、ある程度ハクがついた古典的な名作がテキスト。ですが、創作志望の学生たちが書き下ろしてくる作品は、新鮮なものばかり。混沌とした現代社会との距離感を自分なりにつかみ直し、言語化しようとする努力が透けて見えるようです。時には書き手の「私」と密接に結びついたものもあり、読み手のこちらも変な身がまえを解除して、それと直で向き合うしかありません。

現代の若者にとって、小説を書くのは、時代に逆行した営みであるように思えます。けれども、SNSなどで手軽に、しかも直接的な言葉が行き来するようになった昨今、そのような場でしか本当に自分の言いたいことは伝えられないのかもしれません。

大学の外に目を向けても、エッセイや日記が静かな流行を見せ、同人雑誌を発行し手売りするイベントも活況を呈しています。社会から少し離れて、「私」を見つめ直したい。限られた読者でも良いので、自分らしい言葉を発信したい。そんな感覚を、SNS疲れした若者世代こそ、求めているのかもしれません。

ぶっきらぼうで、ところどころ飛躍があって、どこか危なっかしい。けれども、そうして精一杯まとめられた文章を読むことは、楽しい。価値が定まった名作を読み直すのと同じくらいに。

「書くことは、世界を肯定することだ」。小説家の保坂和志さんは、そう未来の書き手たちにエールを送っています。自分の言葉で世界を捕まえようとする学生たちの肯定の力を、私もまた、力強く肯定したいと思っています。